

近代フランスにおける王立庭園の創設

ーラ・ブロスからファゴンの時代ー

大橋完太郎

本論の目的は、今日ではフランス国立自然史博物館 (Muséum national d'Histoire naturelle) 内の植物園 (Jardin des Plantes) として知られているフランス王立庭園 (Jardin du Roi) の歴史的展開を明らかにすることにある。とりわけ今回は、16世紀に始まる王立庭園の創設から絶対王政の時代を経て、フランス博物学の全盛期を迎える直前の18世紀初頭までの時代を対象にする。いわばフランス博物学の「前史」とも言えるこの時期のフランス王立庭園をめぐる歴史的経緯を追うことによって、そこで展開されてきた学問をめぐる政治的状況の推移や、医学や科学、植物学といった諸学が、今日の生物学の前身である博物学を準備する経緯を明らかにするとともに、そこにおいて「庭園」が果たした役割を考えてみたい。近代初期のフランス博物学の成果としては、ビュフォンの『博物誌』がもっとも一般に知られたものであるが、そうした博物学の展開を王立庭園の創設から始まる歴史的経緯と並行して考えることによって、フランスの博物学に独自の学問的特徴を明らかにすることができるのではないだろうか。とりわけそこで、「王立庭園」という場が果たした役割も、非常に大きいものがあったと考えられる。今回は、王立庭園の創設からトゥルヌフォールの植物学体系が完成した18世紀初頭にいたるまでの王立庭園の歴史的・学問的な展開に注目し、その経緯について報告する。

1. パリ王立庭園の誕生

1793年に国立自然史博物館となる「王立庭園」(あるいは「王立薬草園」)は、コレージュ・ド・フランスと名前を変えた王立コレージュについて、王政が創立したもっとも古い科学研究機関である。ふたつの施設は、講義がつねに開講された点、免状を出さなかった点、大学やアカデミーを廃止した革命時代にも名前を変えるだけで存続した点で共通している。このふたつの研究機関は、パリ大学の欠陥を穴埋めするという同じ必要性に応えるものであった。フランソワ一世は、パリ大学が教えることを拒否していたギリシャ語、アラビア語、ヘブライ語の教育のために王立教授団を創立したが、これらの文献学に加えて、科学教育もパリ大学の欠陥として考えられていた。パリ大学ではなされない科学教育を補填するための施設が、この「王立庭園」(「王立薬草園」)であったと考えられる。

ルイ十三世は王立教授団を王立コレージュとし、リシュリューの意見を取り入れ、王立庭園も創立する。今日まで続くフランス行政の伝統はこのようにして創始された。すなわち、大学が科学上の要求や新理論に適応することを拒否していると判断するたびに、政府があらたな研究機関をつくるという伝統である。こうして十七世紀以来、民間技師や技術将校のグランド・ゼコール、つまり、大革命時代の理工科学学校、第二帝政時の高等実務専門学校、第二次世界大戦後の国立行政学院が創立されてきた。

植物園という点から見ると、ヨーロッパでは、十六世紀から十七世紀の初頭にかけて、パリ以外にも大規模な植物園が多数創設されている。イタリアのピサ、パドヴァ、ボローニャ、そしてネーデルラントのライデンにおいて設立されたものがもっとも初期のものであり、これらが設立されたことによって、パリで同様のものを設立することに抵抗がなくなったという状況がある。フランスにおいては、パリの植物園以前にモンペリエに大きな植物園が存在していた。フランス最古のものであるモンペリエの植物園は、アンリ四世の命を受けて、ピエール・リシェ・ド・ベルヴァル(Pierre Richer de Belleval)によって1593年に創設された。ベルヴァルは1540年に建てられたパドヴァの植物園を模範に、医学的な教育のみならず植物学全領域の研究に役立つような植物園を計画し、それを合理的なコンセプトと実践的な設備をそなえたものとして実現させた。研究上の特徴として、採取された原産地の環境に近い環境で植物を育てるように研究が進められた点があげられる¹。パリにおいては、1597年ごろから、ジャン・ロバン(Jean Robin)という庭師によって王立庭園の原型となるような庭園が造成されていたと言われている。モンペリエのものを模して作られたこの庭園は狭いものであり十分な植物を植えることができなかったが、ロバン自身が所有していた広大な庭園もあり、そこに植えられた美しい植物や珍奇な植物は、16世紀の後半にかけて挿絵画家や刺繍作品のモデルとなった。ロバンは1601年にこの庭園の植物1,300点を収めたカタログをラテン語で出版した。それはパリ大学医学部に献呈されている。アンリ四世とルイ十三世に重用されたロバンは公認植物学者(simpliciste)の称号を得て、その名誉は息子のヴェスパジアン・ロバン(Vespasien Robin)にも引き継がれた。ヴェスパジアンは同庭園にある植物1,800点を収めたラテン語のカタログを1624年に刊行している。

ルイ十三世の時代に問題となった学問分野は医学であった。パリ大学医学部は、「共和主義」と平等主義を

標榜する独立団体で、教育においても伝統を墨守し、ガレノスと伝統的な薬剤法をいまだに盲信していた。医学部の大家の一人ジャン・リオラン二世は、優秀な解剖学者でもあったが、ハーヴィの血液循環説を邪説として論駁した。医学部が血液循環説を容認したのは、やっと1627年になってのことである。このパリ大学医学部と対立関係にあったのがモンペリエ大学の医学部である。モンペリエの教授たちは、少なくとも原則的には選抜試験を通った後に、王により任命を受けていた。アンリ四世がモンペリエ大学を自分の庇護の下においたのである。ルイ十三世以降、「王の医師」―「第一医師」という等級のもとに数多くいた―はモンペリエの医師であった。彼らはパリに個人的な顧客をもつ権利を有していたが、このことがパリの医師たちを憤慨させていた。さらに、モンペリエの医師のなかにはプロテスタントが何人かいて、16世紀の革新的な医師パラケルススが発明し、ドイツで発展をみていた無機化合物をベースにした新たな薬剤法をフランスに導入した。また、もっとも有名な「医化学(iatrochimie)」の治療薬は、金属物のアンチモンという有名な吐剤だが、これから「吐酒石」という同じく有名なもうひとつの薬がつくられてもいた。

パリとモンペリエで議論を交わし、ののしり合っているあいだに、王の行政部、つまりリシュリューが医化学者を支持することを決めていた。リシュリューは、『ガゼット』という新聞の創刊者でもありモンペリエの医師でもあったテオフラスト・ルノーを支持した。ルノーは宰相の庇護のもと、パリに無料診療所を設け、そこで医化学を実践した。パリ医学部はその廃止を要求したが、無駄であった。このような雰囲気の中、ルイ十三世は、1626年に発した免許状で、王の庇護のもとにある庭園をパリに設置することを決定した。ギ・ド・ラ・ブロス(Guy de la Brosse)は王の第一医師であるジャン・エロアール(Jean Héroard)によってこの庭園の監督官に任命され、王による承認も得ていたが、財政難もあって計

画の実行は遅れていた。1628年、さまざまな障害、とりわけエロアールの死によって止まっていたこの植物園建築計画が再開される。エロアールの次に王の第一医師になったシャルル・ブヴァール (Charles Bouvard) と財政長官ブティリエからラ・ブ罗斯は承認を受け、1633年にサン・ヴィクトール街に用地が購入された。ようやく1635年、ラ・ブ罗斯の提出した計画に基づいた別の免許状が発行され、場所と予算、人員が確定された。王立植物園の創設にはこうした経緯がある。ラ・ブ罗斯が王の後援を受けることができた理由は、王の第一医師であるエロアールやブヴァールへの働きかけがあったからだとされている。他にも、高い地位に就く以前のリシュリューと懇意にしていたことが、リシュリュー昇進後にラ・ブ罗斯の意見が重用される理由でもあったと考えられている。こうして、1635年から、パリに植物園が実際に存在するようになった。その後も建物を建設せねばならなかったのが、植物園が最終的に公式に人々に公開されるようになったのは1640年になってからのことだ。

2. パリ大学VS.植物園:ギ・ド・ラ・ブ罗斯の化学思想

この間、パリ大医学部はあらゆる手段を用いて計画を挫折させようとしていた。パリの医学部は、ラ・ブ罗斯を「経験主義的 (= 医学を無視した) 部外者 (empirique étranger)」と呼び、ブシャールに訴えて王立庭園で植物学を教えることを禁じようとした。というのも、ギ・ド・ラ・ブ罗斯による植物園の創設は、ソルボンヌの権威に対する化学的医学の挑戦の中でもっともめざましいものであったからだ。パリの植物園は17世紀後半から化学教育の中心となった。スコットランド出身のウィリアム・ダヴィッソン (William Davison) にはじまり、ニケーズ・ルフェーブル (Nicaise Lefèvre)、クリストファー・グレイザー (Cristopher Glaser) といった著名な学者たちが、王立庭園をフランスにおける化学研究の拠点とする上で決定的な役割を果たしたが、そうした歴史的な展開は

ギ・ド・ラ・ブ罗斯に始まる。ラ・ブ罗斯による創設以来、パリの植物園は化学研究のための施設となったのである。この植物園は公的には「薬草園」つまりアンリ四世がモンペリエにつくった植物園をなぞった薬用植物園であり、医学部が薬局活動をするための教育をおこなわないうからという口実のもとに創設されたものだった。しかし、植物園の創設を命じる王令はかなりあいまいなものであった。植物園には「学生に植物の内部と全薬品の実験を見せるため、また薬草および化学的方法によるあらゆる種類の薬の調剤に専念する」ために、三人の「実験教授 (démonstrateur)」と三人の医師が必要とされていた。「化学的」という言葉が使われている点に注目すべきであろう。実際、ギ・ド・ラ・ブ罗斯は新薬の研究をするための化学実験所を建てさせて必要な装備をさせ、化学教育はただちに植物園の教育プログラムの一部になった。だからといって植物がないがしろにされたわけではなかった。1640年にはすでに2,300もの植物が栽培されていた。さらに、王令は以下のことを明確にしている。「上記施設の資料館に、薬草によるものも化合物によるものも含め、すべての薬品の見本と、自然界に見られる希少な事物のすべてを保存することを望む」。こうして「王立資料館」が創設されたのである。

ラ・ブ罗斯については、彼が庭園を創設したということ以外に知られていることはそれほど多くはない。彼はルイ十三世の侍医の一人であり、宮廷仕えの医師の一家の出身であった。父や祖父も王家に仕えた医師であり、そうした環境で育つ中で、当時新説であった化学的医学の教説を取り入れたのではないかと考えられている。ラ・ブ罗斯はモンペリエや他の地域の医学部を出自にしている王の侍医のグループ—なかには医学の学位を持たないものさえいたという—を形成し、新しい化学的知見に基づいた医学を提唱し、旧来の考えを保持するパリ大学との対立状態が続いた。1628年の著書『自然の力と植物の有用性について (De la Nature et utilité des Plantes)』においても、ラ・ブ罗斯は、化学的分析の

技術を用いることで、薬の性質、およびそれが人体にどのような作用を及ぼすかについて、さらなる理解が得られるという見解を示している。とりわけラ・ブ罗斯は化学の医学への応用と実験室でおこなう実験の重要性について強調している。さらに、当時の化学的な知見において重要視されていた鉱物よりも植物を重視し、自然界において鉱物と動物のあいだに位置する植物こそ、人間の身体にとって有効な治療法を与えるものだとして主張した。ラ・ブ罗斯のこうした考えには、実験科学を重視したフランシス・ベーコンからの影響がある。近代初期における王立庭園の設立に際して、設立者ラ・ブ罗斯の思想がそこに色濃く反映されていることがわかる。

ラ・ブ罗斯は1633年に植物園用の敷地を確保してから1641年8月30日(あるいは31日)の夜に逝去するまで植物園に居住していた。ラ・ブ罗斯の死後、9月5日には公証人によって財産目録が作成され、同16日にはフォリオ50枚にも及ぶ目録が完成した²。7日から12日までは書庫の目録作成が行われ、同日12日に実験室の目録も作成された。ラ・ブ罗斯の死後、パリ大学の医学部の一員であったギ・パタン(Guy Patin)による次の辛辣な死亡報告は、パリ大学と植物園との対立関係を示唆する証言として興味深い。

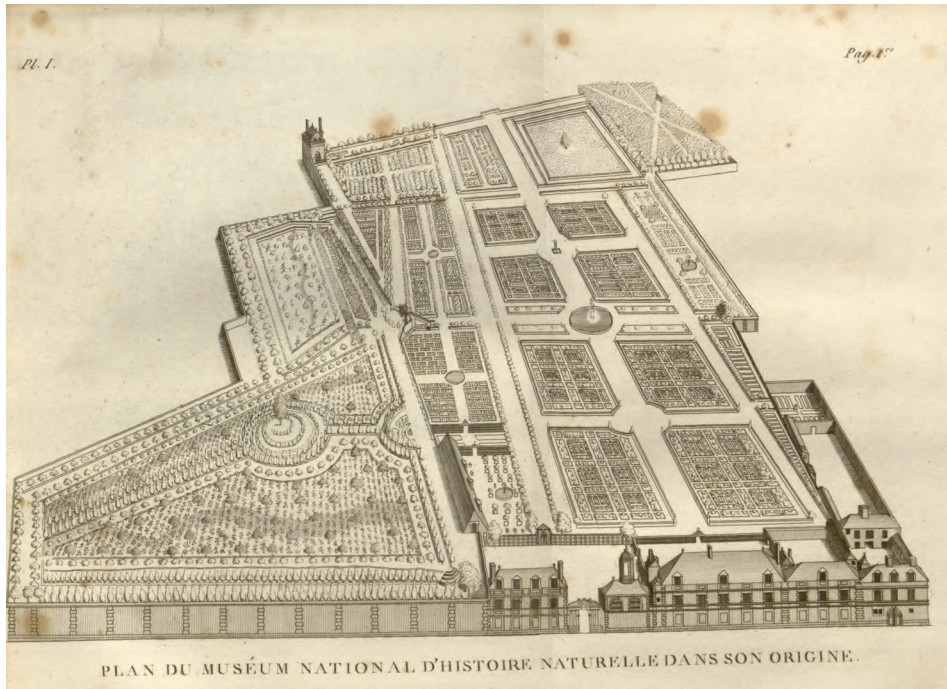
サン＝ヴィクトワール街区に王の庭園をもっていたG・ド・ラ・ブ罗斯が8月最後の土曜日に死んだ。彼はメロンの食べ過ぎとワインの飲みすぎで下痢が続いていた。だから、彼の最期も過失というより習慣が原因であった。彼は体の内側から出てくる臭気に苦しみ、熱を出し、出血しているという点から見ると、下痢は赤痢であった。[...]彼は4日間ものあいだ、全身にスカラベの油を擦りつけ、空腹の状態で、収斂効果のある油を少量加えた4スティエ(3.8リットル)の蒸留酒を飲んだ。それに何の効果もないことが分かると、彼は吐剤[アンチモン]を用

意させ、金曜日の夜に服用したが、その治療を行った翌日の朝に死亡した。[...]同じ金曜日に瀉血をすればよいのではと人々は話していたが、彼は瀉血とは血を好む術学者(彼をしてそう呼ばしめることはわたしたちにとって名誉なことのだが)の用いる治療法であると答え、瀉血されるくらいなら死を好むと答えた。そして実際にそうした。あの世で悪魔が彼の瀉血をするだろう。彼がそうであったように、ペテン師、無神論者、詐欺師、人殺し、人々の虐待者に値する人物として。彼は死に際してさえも神への気持ちを持つことがなかった。それは彼が生き方を模倣し、その名をほしいままにした放蕩者と同じであった³。

パタンによるこの証言は、アストリンゼンやアンチモンを用いたラ・ブ罗斯の化学的医学による治療術と、瀉血を重んじるパリ大学の伝統的医学によるそれとの対立を示しているのみならず、ラ・ブ罗斯のそうした方法が、伝統的な権威にとっては無神論的でリベルタンのであると解釈されていたことを示唆する上でも興味深い。ラ・ブ罗斯の化学的方法は、当時のパリ大医学部のような古くからある制度にとっては、悪魔的で非人道的なやり方だと考えられていたのである。

3. 王立庭園の荒廃: ヴォーチエからヴァロの時代

ギ・ド・ラ・ブ罗斯の死は、創設されたばかりの施設にとって大きな打撃であった。王立庭園の存在と発展は彼の手にかかっていたのであり、創設から考えても早すぎる死であった。ラ・ブ罗斯はさまざまな国から入手した植物を移植して生育環境に合わせた土壌を作るだけでなく、そうした植物を、版画ないしは素描にして刊行することを目論んでいた。そのなかには初期の王立庭園の様子を線画で描いたものもある(【図1】)。



【図1】創設当時の王立庭園図、Jussieu, Antoine Laurent de, «Notice historique sur le Muséum d'histoire naturelle», *Annales du Muséum d'histoire naturelle*, 1, 1802, planche 1.

ラ・ブロスの死後、庭園を発展させるため彼と同じような情熱をもった後継者を見いだすことは難しい。だが、たとえばブヴァールのように、庭園に捧げた努力が後代に称えられている人物もいる。1643年にルイ十三世が没した後、ブヴァールは王の第一医師であることを辞して養子であるクジノ(Cousinot)にその職をゆずるが、庭園の監督官の職にはとどまることを選択した。とりわけブヴァールは、南側の丘を背にした大温室を建設し大花壇の中央の池を造営することに資産を費やした。植物園内でおこなわれた講義については詳しい資料が残っていない。だが、植物園の講義において、創設時の勅令において明示されていた植物の内部についての教育の代わりに、解剖学の教育をおこなうようブヴァールが考えていた。このことは、外科的な対象を植物園の講義で扱うことを禁じるために1643年にパリ医学

部から出された見解に対する態度などから推測される。

ブヴァールによる植物園の運営は1646年にクジノが死んだことで大きく揺らぐ。クジノの後で王の第一医師になったモンペリエの医師フランソワ・ヴォーチェ(François Vautier)が庭園の監督官の地位を要求したことによる。ヴォーチェは訴訟の末に監督官の立場を手に入れ、また、庭園の経理を務めていたブヴァール・ド・フルク(Bouvard de Fourqueux fils)からその権利を剥奪しようとした。フルクはパリ大学医学部に仲介を求めたものの、結局のところ実権はヴォーチェの手に渡ってしまう。訴訟の詳細はおくとして、こうした係争に必要とされる費用は、庭園の維持費を圧迫する。当時の庭園の状況については、フォントネルの次のような証言を参照することができる。

王立庭園の監督官は王の第一医師と兼務であった。一人の人間に属するものとは、その人間の好みに応じたものであり、非常に変わりやすい運命にある。そうした理由で、植物学にほとんどなじみのない第一医師は、王立庭園をなおざりにしてしまった。あまりになおざりにしたので、我慢できなくなるような状態になるまで庭園は放っておかれた。庭園から植物はほとんどなくなってしまい、もはやそれは庭園ではない⁴。

とはいえ、ヴォーチエには、「植物の内部」という無意味な名前の講義を解剖学の講義へと変えたという功績もある。解剖学講義の初代の教授はキュロー・ド・ラ・シャンブル(Cureau de la Chambre)であり、息子であるフランソワ・ド・ラ・シャンブル(François de la Chambre)が彼の後を継いだ。フランソワは1656年にパリ大学に入ることを認められ、父の時代ほどパリ大学との対立を感じてはなかったものの、パリ大学から教授資格を認定されることはなく、解剖学講義は王立庭園でのみ開講されていた。

この時代の化学の教授についても詳しいことはわかっていない。化学が薬学の補助的学問であったということ、パリ大医学部に対立する学問だったということ、またそうしたことが理由でつねに廃止の危機にさらされていたことなどから、著名な学者がこの役職についた可能性は少ない。ヴォーチエが賞賛したウルヌフォールも等しく称えていたヴェスパジアン・ロバンは、植物学あるいは「植物の外部」の実験担当を続けていたが、庭園がひどい状態であったことから察するに、ロバンは監督官であったヴォーチエ同様それについて無頓着であって、管理行政が不十分であってもあえて抵抗することはなかった。

1652年にヴォーチエは死去し、後任にアントワーヌ・ヴァロ(Antoine Vallot)が着任する。モンペリエあるいはランス出身の医師であるヴァロは、摂政でもあった王

女アンヌ・ドートリッシュの第一医師で、ヴォーチエの役職をマザランから買ったと一説では言われている⁵。着任当初はヴォーチエ同様行政官として役割を果たしていなかったが、のちに王立庭園とそこでの学問を熱狂的に擁護するようになる。きっかけは王のおじであったガストン・ドルレアン(Gaston d'Orléan)がブロワ(Blois)の城に植物園を作ったことにあった。この植物園は植物学者ニコラ・マルシャン(Nicolas Marchant)、王子の侍医であるブリュニエ(Brunyer)、エクス医学教授であるロジエ(Laugier)、そしてスコットランド出身でのちにオックスフォードの植物学教授となるモリソン(Morison)によって作られた。多くの植物が植えられたこの庭園は高名を博した。この庭園の存在はヴァロの競争心を煽り、パリにある庭園に植物をもう一度生息させたいという考えを引き起こした。庭園再生の試みに際してヴァロが片腕に任命したのがギ＝クレッサン・ファゴン(Guy-Crescent Fagon)である。ラ・ブロスの甥っ子であるファゴンは、植物園で生まれ、そこで幼少期を過ごし、学問的な素養を身につけた。フォントネルはファゴンを称えて次のように述べている。

ヴァロがこの施設[＝王立庭園]を復興しようと望んだとき、ファゴンは配慮を欠かさず、それはヴァロにも喜んで受け入れられた。ファゴンはオーヴェルニュやラングドック、プロヴァンス、アルプスやピレネーに赴き、数多くの群生植物を手に入れて、それを荒地のような庭園に植えた。ファゴンの財産はたいしたものではなかったが、生まれた地への愛情に突き動かされて、自費でこの旅行をおこなった。というのも、王立庭園は彼のものだったと言うこともできるからだ。これと同時に、ヴァロは、自分の立場によって可能なあらゆる手段を用いて、外国や遠く離れた地の植物を可能な限り集めようとした⁶。

ロバンの後任であったドニ・ジョンケ (Denis Joncquet) が1665年に記すところによれば、こうして復興した庭園の植物は4,000種を超える。ヴァロは大いに満足してファゴンに化学の講座を与え、新しく着任したファゴンはその領域を拡張して鉱物と動物の性質に関する自然科学の研究を含めた。ファゴンはこの地位で名声を高め、献身的な活動を続けた結果、1668年には王家の侍医となった。1671年9月6日にジョンケが没すると、ファゴンはその後継に任命され、化学の講座と植物学の講座を統合した。この地位はヴァロのはからいというよりも、学問に対するファゴンの熱意と名声によって得られたものである。というのも、ヴァロは同年の8月9日にすでに王立庭園で没していたからだ。

4. 王立庭園の再生:ファゴンの時代

ヴァロの死によって王立庭園は再び転機を迎える。あらゆる領域を厳しく監視する宰相コルベール (Colbert) は、庭園の財政において横領があったことを見逃さなかった。コルベールは庭園の建物に関する経理の監督と、そこでおこなわれる研究の管理とを統合し、第一医師については財務官の称号を名目だけ残した。コルベールはヴァロの後継者に、そこで使用される基金の計算を要求した。

コルベールの改革は学問的な領域まで及んだ。先述したガストン・ドルレアンは自分の庭園に多大な資金を投じて多くの国の植物を集めるだけでは飽きたらなかった。彼はロベール (Robert) という技術の高い画家にその植物の絵を描かせた。1669年にガストン・ドルレアンが死んだ後で、コルベールはロベールの絵のコレクションを手に入れ、ロベールを王のキャビネットの画家に任命し、植物の絵を描き続けるよう命じた。ロベールは任命後20年近くも役目を果たし、描いた絵は版画として複製された。1683年にコルベールが死に、その翌年にロベールも世を去るが、ロベールの後を継いで王の収蔵庫の画家となったのがジュベール (Joubert) であ

る。コンデ公付きの画家であったジュベールは、植物を図解するよりは風景画を描く方を得意としていたので、しばらくしてから植物の図示は弟子のオブリエ (Aubriet) に任せることになった。

コルベールによる改革ののち、1672年の4月から新しく第一医師となったモンペリエの医師アントワヌ・ダカン (Antoine Daquin) が監察官の地位に就いた。ダカンは王立庭園での学問をあまり重視せず、もっぱら自分の関心に基づいた経営をおこない、それによって生じた予算の損失を、王立庭園の官職を売ることによって補填した。たとえば、デュヴェルネ (Guichard Joseph Duverney) は、1679年にダカンから庭園での解剖学教授の地位を高額で購入している。解剖学教授の職はかつてラ・シャンブル父子のものであったが、ラ・シャンブル息子が王妃の第一医師に就任した1672年以来、パリ大学の医師であるピエール・クレッセ (Pierre Cressé) に任された。パリの著名な外科医であるピエール・ディオニス (Pierre Dionis) は、クレッセの下で解剖学と外科学の実験を担当していた。ダカンは、1673年1月20日に、王立庭園の教授たちに外科手術、解剖、解剖学的実験をおこなう権利を認める王の声明を手に入れた。その声明によって、王立庭園の教授たちには犯罪者の死体を解剖のために使用する優先権が与えられた。

庭園でおこなわれたデュヴェルネとファゴンの講義は多くの聴衆を呼び、とりわけ外国人に人気を博した。だが、1680年に王太子妃と王妃の第一医師となったファゴンは、教授の仕事を果たせなくなった。当初ファゴンは自分が生まれ育った場所で教授する職を手放すことを拒んでいたが、徐々にその職を、彼がその仕事をよく知っているパリ大学の同僚に替わってもらうようにした。化学の授業を担当したのはベルジエ (Bergier)、ルイ・ルムリ (Louis Lemery)、そしてサン＝ヨン (Saint-Yon) である⁷。植物学の講座は1683年までモヴィラン (Jean Armand de Mauvillain) が担当した。1683年という年は、

王立庭園にとって重要な年となる。なぜなら、ファゴンによって招聘されたジョセフ・ピトン・ド・トゥルヌフォール (Joseph Pitton de Tournefort) が、この年、植物学講座の教授に就任するからだ。

ファゴンは、1693年に王の第一医師と王立植物園の園長に同時に就任した。彼はパリ大学の医学博士であったので、パリ派とモンペリエ派との戦いにも、医学部と植物園との戦いにも終止符を打つことができた。彼は1665年から植物園で化学を教えていた。ファゴンは園長職と監督官との職とを兼任し、教育を発展させ、優秀な「実験教授」を選んだ。たとえば植物学には前述のトゥルヌフォールやアントワーヌ・ローラン・ド・ジュシュー (Antoine Laurent de Jussieu) がいたし、化学にはジョフロワやブルデュック、解剖学と外科学にはデュヴェルネ (Guichard Duverney) とラ・ペロニーがいた。ファゴンはまた、1686年から、植物園における化学講座を公認のものとし、著名な教授にその科目を担当させた。遠国への研究旅行を奨励し、南洋の植物を輸入して適応させ、キナノキを栽培してルイ十四世のマラリアの治療に当たった。彼は植物園内に600席もある階段教室を建てさせてもいる。ファゴンの尽力により、植物園は近代的な真の科学研究機関となった。

5. トウルヌフォールの植物学

ファゴンの時代から王立庭園と旅行者との結び付きは深くなっていった。旅行者は航海先で新種の植物を採集してくるという役目を担った。この時期のフランスの植物学者として知られるトゥルヌフォールは、そうした旅行者としても著名な人物でもあった。1677年に南仏の神学校を卒業したトゥルヌフォールは、南仏の花を調べて、植物標本を作製する。植物標本の作製は、その後も中東への渡航や王立庭園においても続けられた。1679年にトゥルヌフォールはモンペリエ大学の医学部に入学し、モンペリエ近郊の植物を調査し、採集する。1681年には彼はピレネーとカタルニアを調査し、広い

調査に基づく彼の博学が多くの学生を引きつけはじめた。ファゴンは1683年にトゥルヌフォールに王立庭園の植物教授の職を譲るが、1686年までトゥルヌフォールはなおもスペイン、ポルトガル、イギリス、オランダの植生調査を続けた。

1694年に彼は『植物学提要あるいは植物を知るための方法 (*Elements de botanique ou Méthode pour connaître les plantes*)』を出版する。この書物は1700年に彼自身でラテン語に訳される。1698年には「病を機械論的な方法で治療できるか? (*An morborum curatio ad mechanicae*)」という論文でパリ大学医学部の博士号が与えられる。同年彼はパリの植物誌の書籍も刊行する。またその翌年には彼の講義録が『植物学 (*Schola botanica*)』という名で編纂され、出版される。

1700年にトゥルヌフォールはルイ十四世によってレバント (地中海東岸のレバント地方) に派遣される。その目的は「レバント地方で植物・金属・鉱物についての調査を行い、その地域の病気についての知識を得て、実際に用いられている治療法を学び、医療と自然史に関するあらゆることを身に付けてくる」ことであつた。トゥルヌフォールの渡航はこの時期では例外的なものであつた。というのも、この時期に渡航したのは大半が聖職者であり、博物学者は、むしろ収蔵庫 (Cabinet) に閉じこもっているのが習わしだったからだ。1700年から1702年にかけて、トゥルヌフォールはドイツの医師であり博物学者でもあるギュンデルスハイマーと、挿絵画家のクロード・オブリエとともに、ギリシャ、トルコ、アルメニアからアララト山にまでいたる、地中海から中東の地域を探索した。アララト山でノアの方舟を見つけることはできなかったが、中東の植物およそ1,400種、およびオブリエによる美しいデッサンを持ち帰り、王立庭園の植物種を豊かなものとした。帰国後彼はコレージュ・ド・フランスの一員に加えられ、王立庭園の監督官にも任命された。

トゥルヌフォールが『植物学提要』で示した分類の仕

方は、次のようなものである。花、葉、根、茎、味を吟味することによって、似ているものと似ていないものを区別する。とりわけ花冠に注目することで、彼は10の異なる形と分類不能なその他の形からなる11の分類を考案した。とりわけ第一の区別は、花卉があるもの、花卉が一つのもの、花卉が多数あるものという分類であった。

トゥルヌフォールは花卉があるもの、花卉が一つのもの、花卉が多数あるものという分類を最初に行う。そこから彼はあらゆる種類のものがそこに収まるよう分類表を作っていく。その結果、この体系のなかでは、たとえば単子葉植物について、「鐘形花、鈴形花、鈴鐘形花、漏斗形花、ソーサー形花、薔薇状花、鼻形花、口唇形花、そして不規則形の花」という分類が施される。その他の花の種類にも同様の分類を施すことで、自然界に存在するあらゆる種類のリストを作成することができる。すべての植物は、必然的にどれかひとつの分類に属するのである。この分類の仕方は、一般的なものでありつつ、比較的単純なものなので、植物学に習熟するための手早い手段と考えられるようになった。その結果、トゥルヌフォールの方法は、長きにわたって広汎な人気があった。1797年になってもなお、『植物学提要』は、『植物を知るための提要 (*Elements pour les connaître les plantes*)』という、アントワヌ・ド・ジュシューによって増補された版が、あらゆる階級の市民に向けたものとして発行されている。

けれどもトゥルヌフォールの体系には限界があった。この分類方法は、当時ヨーロッパで知られていた植物に対してしか有効でなかったという点である。トゥルヌフォールが植物の種類について完全なリストを作成したと主張しても、ヨーロッパの外の地域で旅人が将来出会う植物は、この基本的な分類格子や、数が決まっている組織の分類に当てはまらないかもしれない。つまり、トゥルヌフォールの「植物を知るための方法」とは、一般的な野心を説明するものでしかなく、「種を分類し、それによって、植物学が対象としているあらゆる物質を、

一目で、あたかも一つの一般的な地図の上に配置して、見渡せるようにする」ものなのである。けれども、このような「一般的な地図」への野心は、現実には不可能に存在しうる花の構造を処理できないという事実によって挫折するものであり、したがって、もしこの包括的な計画を続けるとしても、それが実現化する際に徹底的でないものとなることによって脅かされていることになる。こうしたトゥルヌフォールの体系は、やがてリンネの植物学体系に次第に取って変わられることになる。

6. 結論

王立庭園の創設の背景には、多くがモンペリエ大学出身者から形成される王の侍医のグループと、パリ大学医学部との対立が存在していた。この対立は、単なる地域差に基づいたものではなく、むしろ新しい化学的な医学を推進したモンペリエの医学と、伝統的な医学的見解を保持したパリの医学との学問的な対立であった。

設立当初の王立庭園の学問的傾向は、ラディカルな化学者だった創設者ギ・ド・ラ・ブロスの学問観が反映されている。ラ・ブロスの死後、ヴォーチュエとヴァロの時代に、王立庭園は監督官の権利拡張欲求とそれに伴う係争、予算の圧迫によって一時荒廃するが、ラ・ブロスの遠縁であるファゴンが監督官に着任することで再び盛期を迎える。ファゴンの着任によってパリ大学と王立庭園との長きにわたる対立状態は終わり、またファゴンが多くの優秀な実験教授を採用することによって、多くの学問分野も活気を取り戻した。

学問的な変遷を概括すると、当初医学部の補助機関として創設された王立庭園には解剖をおこなう権利は認められていなかった。医学を補助する手段としての薬学と化学の発達が、王立庭園の学問を特徴付ける最初の要素であったと言えるだろう。さらに、ベーコンの実験哲学の精神を受けついでラ・ブロスのリベルタンの（すなわち唯物論的）思想によ

って、王立庭園で進められる学問は、独自の実験科学として、フランスのみならず外国にも広く影響を与えるものとなった。

博物学は、薬草学をもとにして発達した植物学に加わる形で、ファゴンの時代に鉱物学と動物学が増設されたことによって準備される。王立庭園における植物学を確かなものにしたのはトゥルヌフォールであり、のちにそれはリンネからの影響を大きく受けながらビュフォンの博物学へと引き継がれていく。博物学のこうした発展の背景においても、創設以来あった化学的思考の存在は大きいものであったと思われるが、18世紀博物学の発展においてリンネの思考や化学が果たした役割については、稿を改めて検証する必要がある。

最後に、本稿ではふれることができなかったが、パリの王立庭園を庭園史の中でどのように位置付けるべきかという問題が残されている。本稿では薬学・化学的な側面が強調されたが、講義室や実験室、温室などに加えて、渦巻き状に続く小径や展望台など、王立庭園はあらゆる設備にスペクタクル的な施設としての側面がある。こうした美的な側面が、同時代の著名な庭園であるヴェルサイユやサン・ジェルマン・アン・レイの庭園とどのような関係にあるのかについても、政策史や造園史といった側面から考察することができるのではないだろうか。

*本研究はJSPS科研費24720160、および神戸女学院大学
研究所総合研究助成の助成を受けたものです。

<注>

- ¹ モンペリエの植物園については以下を参照。Louis Delieu, “Pierre Richer de Bellval”, *Montpellier Hippocrates*, n.40, été 1968, p.7-24.
- ² ラ・ブロスの財産目録はパリの国立文書館に収蔵されている。LII, 20, 5 septembre 1641, inventaire après-décès.
- ³ Rio Howard, INTRODUCTION de *La Bibliothèque et le laboratoire de Guy de la Brosse*, Genève, Droz, 1983, p.1.
- ⁴ Fontenelle, *Eloge de Fagon*, *Mem. de l'Académie des sciences de Paris*, 1718, p.95.
- ⁵ Antoine Laurent de Jussieu, «Notice historique sur le Muséum d'histoire naturelle», *Annales du Muséum d'histoire naturelle*, 1, 1802 p.7-8.
- ⁶ Fontenelle, *Eloge de Fagon*, p.95.
- ⁷ 彼らの前に実験教授の職に就いていた人物としてモイーズ・シャラ(Moïse Chara)がいる。シャラは1676年に『ガレノスの化学的薬品一覧(Pharmacopée galénique et chimique)』を著し、その本は庭園での講義の教科書として用いられた。

<参考文献>

- Delieu, Louis. «Pierre Richer de Bellval», *Montpellier Hippocrates*, n.40, été 1968, p.7-24.
- Duris Pascal, *Linné et la France: 1780-1850*, Genève, Droz, 1993.
- Fontenelle. *Eloge de Fagon*, *Mem. de l'Académie des sciences de Paris*, 1718.
- Gayon, Jean (dir.), *BUFFON 88*, Paris, Vrin, 1992.
- Hanks, Lesley. *Buffon avant l'«Histoire naturelle»*, Paris, P.U.F., 1966.
- Hoquet, Thierry. *Buffon/Linné: Eternels rivaux de la biologie?*, Paris, Dunod, 2007.
- Howard, Rio. *La Bibliothèque et le laboratoire de Guy de la Brosse*, Genève, Droz, 1983.
- Jussieu, Antoine Laurent de, «Notice historique sur le Muséum d'histoire naturelle», *Annales du Muséum d'histoire naturelle*, 1, 1802.
- «Seconde notice historique sur le Muséum d'histoire naturelle», *Annales du Muséum d'histoire naturelle*, 2, 1803.
- «Troisième notice historique sur le Muséum d'histoire naturelle», *Annales du Muséum d'histoire naturelle*, 3, 1804.
- «Quatrième notice historique sur le Muséum d'histoire naturelle», *Annales du Muséum d'histoire naturelle*, 4, 1804.
- Laissus, Yves. *Le Muséum national d'histoire naturelle*, Paris, Gallimard, 1995.
- Roger, Jacques. *Buffon*, Paris, Fayard, 1992.
- *Les Sciences de la vie dans la pensée française au XVIII^e siècle* (Nouvelle édition), Paris, Albin Michel, 1993.
- Spary, E. C. *Utopia's Garden*, Chicago, The University of Chicago Press, 2000.
- ピエール・ガスカール 『博物学者ビュフォン』 石木隆治訳 白水社、1991年
- 高橋雄造 『博物館の歴史』 法政大学出版局 2008年。
- 武居二郎・尼崎博正(監修) 『庭園史をあるく』 昭和堂 1998年
- ジャック・ロジェ 『大博物学者ビュフォン』 ベカエール直美 訳 工作舎 1992年

